

聖書：創世記 24：1～9

説教題：イサクに妻を

日時：2023年11月12日（朝拝）

12章から見て来たアブラハムの信仰の生涯。22章の一人子イサクをささげる出来事においてそれは頂点に達しました。アブラハムは見事に神のテストに合格し、今や神を心から愛し、恐れ敬う者であることを示しました。それに続く23～25章はアブラハムの生涯の最後の出来事を記したものです。先週読んだ23章は妻サラの死と葬り、今日見る24章は息子イサクの結婚、そして25章はアブラハムの死と葬りを記しています。

今日から開く24章は実は創世記の中で最も長い章です。これはそれだけここに記される出来事が重要であることを指し示してもいるのでしょうか。この章を3回に分けて見て行く予定です。今日はその最初の部分です。1節に「アブラハムは年を重ねて、老人になっていた。主は、あらゆる面でアブラハムを祝福しておられた。」とあります。すでに妻サラを失っていたアブラハムです。浮かび上がって来る問いは、神との間に結ばれた契約は今後どのようにイサクに受け継がれていくのかということです。主はアブラハムを祝福し、その子孫を大いに増やすと言われました。この約束の成就のために課題となって来ることはイサクの結婚です。彼にふさわしい伴侶が与えられることです。そこでその嫁探しの使命をアブラハムは2節で自分の全財産を管理している、家の最年長のしもべに託します。以下の記録は単にその結婚の成り行きを記したものではありません。私たちはここにもアブラハムの信仰を見るのです。そして後でも触れますが、今日の箇所には聖書に記されているアブラハムの最後の言葉があります。それは彼のこれまでの信仰の学びが結晶化した言葉となっていることに私たちは良く注目したいと思います。

まずアブラハムは最年長のしもべに「あなたの手を私のももの下に入れてくれ」と言います。これは3節から分かるように神に誓わせる行為であったようです。はっきりとは分からないのですが、多くの学者たちは「ももの下」は「生殖器」のことだろうと言っています。今日も誓いをする際、大事なものの上に手を置くことがあります。たとえばアメリカの大統領が就任する際、聖書に手を置く姿を見ることがあります。それと幾分似ていると言えるかもしれません。生殖器は子孫の約束と関連する重要な

部分と言えます。また 17 章で神との契約のしるしとしての割礼について見ました。詳しいことは分からないのですが、これは厳粛な誓いに伴う儀式であったことは間違いないでしょう。

そしてアブラハムが誓わせたこと、まずその消極的面はカナン人の娘たちの中からイサクの妻を迎えてはならないということです。アブラハムはこの地を後に与えると神に約束されてカナンの地で寄留者生活を送っていますが、その周りにいる人々の中から妻を選んではいけません。聖書にはこれまで、そのような明白な神の言葉はありませんでした。しかしアブラハムは今まで示されて来た神の御心から考えて、このように述べたのです。はっきり言われていないから何でも良いということにはなりません。すでに言われて来たことを良く考慮し、神の御心は何かと考えるアブラハムの姿勢がここにあります。人間的に考えるなら自分が今住んでいる地域の人々から妻を得る方が得策であると思われます。まず候補者が増えます。能力のある人、美しい人は周りにたくさんいたでしょう。またそうする方がこの地方に良く溶け込み、社会的地位を得ることにつながると考えられます。しかしアブラハムは信仰に立って考えた時、カナン人から妻を得ることは正しくない判断しました。カナン人はやがて（数百年後の話ですが）ここから追い払われるべき人々です。彼らの悪が超えてはならないレベルに達した時、彼らは追い払われることになる」と神は創世記 15 章 16～21 節でアブラハムに告げておられました。アブラハムはカナンの地を与えられると言われてここに住んでいるのに、この地から追い払われる人々と一緒にいるべきでしょうか。そしてその中心にある問題はカナン人の偶像礼拝でした。いくら人間的に素晴らしくても、ここが違ったらその結婚生活には多くの困難と危険が伴います。ですからこれより後の時代、モーセの時代に主がはっきりこう言われるところがあります。出エジプト記 34 章 14～16 節：「あなたは、ほかの神を拝んではならない。主は、その名がねたみであり、ねたみの神であるから。あなたはその地の住民と契約を結ばないようにせよ。彼らは自分たちの神々と淫行をし、自分たちの神々にいけにえを献げ、あなたを招く。あなたは、そのいけにえを食べるようになる。彼らの娘たちをあなたの息子たちの妻とするなら、その娘たちは自分たちの神々と淫行を行い、あなたの息子たちに自分たちの神々と淫行を行わせるようになる。」つまり異教信仰を持つ伴侶が神の民を偶像礼拝へ導くことになるということです。そして実際、この神の命令を守らなかったために偶像礼拝に落ちたケースが聖書にいくつも記されています。たとえば民数記 25 章 1～3 節にはイスラエルがモアブの娘たちと淫らなことをし、やがてそ

の娘たちが招く異教の神々の食事会に参加し、その娘たちの神々を拝んだという記事が出て来ます。あるいは列王記第一 11 章 4 節には、あのソロモン王が外国人の女性を妻とし、彼女たちを愛したため、他の神々に心が向けられるようになったと記されています。アブラハムはまだ明白な啓示は受けていませんでしたが本質は捉えていました。そこで結婚相手は同じ信仰を持つ者でなければならないとしたのです。結婚はあらゆる人間関係の中でも最も深い基礎的關係であることを考えれば当然のことと言えます。ここで一致できなければ生活全般に亘って一致することができなくなり、やがて自分自身の大切な信仰が蝕まれて行くという結果になりかねません。

アブラハムは 4 節でより積極的面からこう言います。「あなたは、私の国、私の親族のところに行って、私の息子イサクに妻を迎えなさい。」 こう言われてこのしもべが具体的に遣わされるのは、10 節からアラム・ナハライムのナホルの町であったことが分かります。これはカナン之地からかなり遠い北方の町です。アブラハムの親族については 11 章 27 節以降に記されていました。アブラハムの父はテラという人で、テラから生まれたアブラハムの兄弟はナホルとハランでした。この内、ハランは早くに死に、その息子のロトをアブラハムはこれまで面倒を見て来ました。そのロトが途中でアブラハムと共に生活し、その後、ソドムに住み、どうなったかを私たちはこの創世記で読んで来ました。残る近い親族としてナホルの家族があります。そして私たちは 22 章 20～24 節でナホルの家に多くの子どもたちが生まれたというニュースがアブラハムに伝えられた記事を読みました。22 章 20 節以下を見ると、ナホルにはミルカによって 8 人の子どもが生まれ、さらにそこから子どもが生まれたことも記されていました。このニュースを受け取っていたアブラハムは、ここにイサクの妻を見出だす大きな可能性を見ていたのではないのでしょうか。私たちはそれでも問うかもしれません。果たして彼らは主を信じる信仰者だったのかと。アブラハム自身そうだったように、彼の家系も偶像礼拝と関係がなかったわけではありませんでした。しかしカナン人とは違います。時代を遡るとノアの 3 人の息子の内、ハムの子カナンは呪われよ！と創世記 9 章 25 節で言われていました。一方、次の 9 章 26 節では「ほむべきかな、セムの神、主」と、セムの子孫が祝福されていることが語られました。アブラハムの家もナホルの家もこのセムの流れの中にあります。そしてこのナホルの家はアブラハムの家と良い関係を持っていたようです。ですから先ほど触れた 22 章 20～24 節では、かなり遠い地域にありながらもナホルの家のニュースがアブラハム家に伝えられていました。またこの後もイサクの息子ヤコブがナホルの家族のところへ一時逃れ

て行くという話が出て来ます。このようなつながりのある親族であれば、アブラハムの家の信仰により同調できるという面があります。そして何と言っても大事なのは本人の信仰です。後で見ることになりますが、しもべが嫁探しをして、その人がついて来るかどうかが一番大事な点です。ついて来るということはイコール同じ信仰に立つということです。それが条件としてこの後、語られます。ですからその家が異なる背景を持っていても本人が同じ信仰を持つ人となるならもちろん良いのです。その条件の下で判断し、ふさわしい人を見つけて来るように！という使命をこのしもべは与えられます。

さてしもべは慎重を期して一つのことをアブラハムに問います。それは5節にある通り、その娘さんが私についてこの地に来ようとしない場合はどうするか。その場合、ご子息をアブラハムの出身地に連れ戻すことになるかというものです。確かにこれから向かう場所は遠い地です。その娘の親は、そんな遠い地域に娘を出すことはできないと渋るかもしれません。それに対してアブラハムは6節で「気をつけて、息子をそこへ連れて戻ることのないようにしなさい」と言います。そして三つのことを語ります。

まず一つ目は神の約束についてです。天の神、主は、私の父の家、私の親族の地から私を連れ出し、私に約束して、『あなたの子孫にこの地を与える』と誓われた。神はここへ私を連れて来て、この地をあなたの子孫に与えると言われた。だからこの地を離れるようなことがあってはならないと言います。確かに故郷に戻れば結婚しやすいかもしれません。選択の幅はぐっと広がるかもしれません。しかしこの地を離れることは主の約束を投げ捨てること、主への信仰を投げ捨てることです。そのようなことをしてはならないと言います。

二つ目は、この約束を与えた方があなたの前に御使いを遣わされるということです。これは目に見える形で御使いが先導するという意味ではありません。この後の記事にそのようなことは出て来ません。これは神の導きを擬人的に表現したものと考えられます。もちろん文字通り、目には見えませんが実際に御使いが先導すると考えても良いのです。言いたいことは約束を与えた神は、その約束を果たすための導きもくださるということです。アブラハムのしもべはこれから自分の力でイサクの妻を見つけて来るのではないのです。主が御使いを遣わし、いわば超自然的な御手をもって上から

導いてくださるのです。だからあなたはその神に信頼して行きなさい！とアブラハムは言っているわけです。

そして三つ目は8節です。もしその娘があなたについて来ようとしなければ、あなたはこの私との誓いから解かれるということです。すなわちイサクに妻を迎える任務から解かれる。言い換えれば人間的にうまく話をまとめようとして妥協してはならないということです。しもべとしてはアブラハムに遣わされた以上、何とか結婚を成立させたいと願うでしょう。何の結果も得られないまま帰ることだけはしたくないと思うでしょう。しかしそのあまり、人間の力で必ず妻を見つけて来なければならないという風に考えてはならない。もし相手の人があなたについて来ようとしなければ、それはその人は神の御心の人ではないということです。神が備えた人ではないということです。そういう状況で無理に話を進めようとする必要はないし、むしろそうしてはならない。その場合、あなたはイサクに妻を迎えるという私との誓いから解かれるのだから、そのまま帰って来なさい。我々はこの方法でイサクの妻を探そうと試みたが、神はまた別の道、別のご計画を持っておられる。だから人間的に無理に事を進めようとして道を踏み外すことがあってはならない。私の息子をそこに連れて戻ることだけはしてはならない。そう述べてアブラハムはしもべを遣わしたのです。

先に触れた通り、この6～8節のアブラハムの言葉は聖書に記されている彼の最後の言葉です。だとするならここを軽く読み飛ばすことはできません。むしろこれは彼のこれまでの信仰の生涯で学び得た成果が凝縮された言葉と言えます。ここに私たちが最大限の関心をもって注目すべきアブラハムの信仰告白があると言えます。彼はこれまで幾多の困難を通過して来ました。その中で人間的にうまく乗り越えようとして妥協した時もありました。たとえば飢饉でエジプトへ逃れた時、彼は妻サラが美しい女性であったため、自分はその夫であると明かしたら殺されると恐れて妻を妹だと偽りました。しかしそういう人間的画策はうまく行きませんでした。かえってそれは裏目に出ました。妻サラはエジプトの王に妻として召し入れられてしまいました。神の憐れみによって何とかそこから救い出されましたがアブラハムは大いに恥を受けました。彼は同じことをもう1回やりましたが、やっぱりうまく行きませんでした。あるいは子どもがなかなか与えられないため、女奴隷ハガルを通して子を得ようとしたこともありました。その結果、当初はうまく行ったように思いましたが、後に取り返しのつかない悲劇を家庭内にもたらすこととなりました。そんなアブラハムは神に全

く信頼して従うことを学び、ついに一人子イサクをささげることまでしました。そしてそこで神は備えてくださる神、アドナイ・イルエであることを深く知る者となりました。

今日の箇所も同じです。神はイサクを通して子孫を大いなる民とすると約束くださいました。ですから神はそのために必要なイサクの伴侶を必ず備えてくださるはずで、従ってその伴侶探しの際に大事なことは、まず神が備えている人がいると信頼すること、そしてその神を信じる者として神に従う歩みをすることです。神が示しているガイドラインに沿って神の御心を尋ね求めることです。その時に、ついに神が備えたもう人を見出だすことになるのです。

これは結婚以外のことにも広く適用できることです。私たちも色々難しい状況に置かれることがあります。そこで聖書に従うと窮屈だと思われる時、選択の余地が少なくなると人間の頭では感じられる時があります。その時、私たちは勝手に聖書の基準を緩めたり、いくらか妥協することによって、目の前の問題解決を図るように誘惑されます。しかしそういう道を進んだら結局は正しい道から外れ、神の祝福から遠ざかってしまいます。本来話は単純です。私たちは主を信じ、その信仰に立って主の御言葉に従う歩みをすれば良いのです。箴言 3 章 5～6 節：「心を尽くして主に拠り頼め。自分の悟りに頼るな。あなたの行く道すべてにおいて、主を知れ。主があなたの進む道をまっすぐにされる。」 マタイの福音書 6 章 33 節：「まず神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて、それに加えて与えられます。」

今日の箇所を通して私たちが結婚について改めて持つべき確信は、主がふさわしい人を備えていてくださるということです。その主に信頼していることを主に従う歩みにおいて表す者でありたいと思います。そして主が備えていてくださる人を見出だし、その人と結ばれ、ともに主のために生きる者とされたいと思います。またすべてのことにおいても神は備えてくださる神です。その神を信じて神に従い、御使いを先に遣わして事を導いてくださる神により、神が備えたもう最善にあずかるアブラハムの子孫、信仰の民の歩みへ導かれたいと思います。